

2017年7月3日

立教大学国際学術研究交流制度
2017年度「招へい研究員」報告書

1. 招へい概要

受入 教員	所属・職	社会学部・教授
	氏名	関 礼子
受入学部・研究科・研究所		社会学部
招へい 研究員	所属・職	Academic Researcher / Lecturer, College of Population Studies, Chulalongkorn University 協定の有無：全学 所在国：タイ
	氏名	Tadashi Nakasu
招へい期間		2017年6月1日～2017年6月30日（30日間）
研究経費		535,050円

2. 滞在中の活動

来日日および離日日を含め、滞在中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。講演会やセミナーなどを開催した場合はタイトル、会場、参加者数等を記載してください。

活動内容記入例) ○○について研究討議、共同研究、講演、講義、大学院生への研究指導等

年月日	活動内容
2017年6月1日	来日
2017年6月1日	研究打ち合わせ セミナーの進め方を確認するとともに、災害に関する国際共同研究の可能性について意見交換した。
2017年6月9日	災害理論及び日本の災害経験と教訓（セミナー） 災害とは何か。どのように災害をとらえればよいのか。日本の自然災害の歴史的特徴は何か。災害に関する理論について概観するとともに、日本における歴史的なターニングポイントとなった災害をその背景とともに俯瞰した。社会調査研究室、6名参加。遠方からは岩手県からの参加があった。
2017年6月14日	世界の地域別災害の特徴と大規模災害（セミナー） 世界の災害の地域的特徴は何か。災害に弱い地域はどこか。災害に弱いのは地域社会とどう関係しているのか。世界の災害を俯瞰するとともに、アジア、アメリカ、アフリカ、ヨーロッパ、及びオセアニア、各地域における災害特性と特徴的な災害事例を概説。打ち合わせ室。4名参加。

2017年6月16日	<p>研究打ち合わせ</p> <p>タイにおける自然保護関連の研究動向に関する意見交換。</p> <p>アジア地域の自然災害の特徴及びタイにおける自然災害（セミナー）</p> <p>アジアの災害の特徴は何か？タイの災害の特徴は何か。アジア及びタイの地域社会、文化、さらには、政治がどのように災害と関係しているか。日本とはどのような関係があるのか。アジア及びタイにおける災害の特徴について、データベースにアクセスしながら議論した。タイの洪水による日系企業サプライチェーンの打撃などを事例に。社会調査研究室。4名参加。</p>
2017年6月22日	<p>研究打ち合わせ</p> <p>タイの津波および洪水における日本人・日系企業の被災に関する状況に関する意見交換。</p>
2017年6月28日	<p>研究打ち合わせ</p> <p>災害の碑に関する議論と意見交換。</p> <p>災害研究への招待：災害理論、災害調査法、及び災害事例への適用（セミナー）</p> <p>災害研究の特徴、研究方法、災害研究の理論、災害情報の情報源や収集方法、最新の国際的な取り組みを含めた災害調査手法について。社会学における災害研究の必要性和、土木・工学系の議論においていかに切り込むことができるか。戦略的な研究手法に関して議論した。打ち合わせ室。3名参加。</p> <p>研究打ち合わせ</p> <p>国際共同研究のためのタイ視察について意見交換を行った。</p>

3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果を、本学の学術研究、教育活動、国際交流の進展へ与える効果を含めて、記載してください。講演会やセミナーなどの参加者層（学生、大学院生、一般、教職員等）、会場の様子なども記載してください。

日本における災害研究は内向きで、諸外国のグローバルに目くばせした災害研究とは異なった趣を持っている。

セミナーでは、国際的な災害研究における概念や方法論のプラットフォームを念頭におきつつ、社会学領域の災害研究と政策への寄与について議論する方式で進められた。災害は発生地 of 政治的社会的状況による特性を持つ。他方で企業の海外進出や大学カリキュラムによる組織的な留学生送り出しなどが進む現在、災害時の緊急対応をいかに進めていくかを考えるうえでも、世界各国の災害特性を知ることは有意義であろう。

また、国際比較のなかで、日本の災害対応の特性や限界も明示された。アメリカの FEMA のような強い権限を持つ政府機関の設置の検討がうまくいかない状況や、復興の指標として人口を据えた場合、被災前の人口動態が被災後の人口動態に相関するがゆえに、事前復興が必要であるという見解が示された。後者に関しては、事前復興がコンパクトシティの議論にからめとられる懸念について議論が交わされた。

さらに、災害が暦のリズムからのズレであるというタイの事例に示されたが、この議論は災害常襲地の議論や、そもそも災害とは何かという定義への自省を促すものであった。

タイ洪水における工業団地の被災は、もともと洪水の恩恵を持つ地域が持つリスクともとらえることができ、自然を封じ込める近代の発想が深刻な災害を生み出しているという点についても、意見が交わされた。

参加者は教員および大学院生であり、今回のセミナーを契機に、タイの津波被災地の碑など記憶伝承に関する視察や国際共同研究を具体化していくことについて、意見交換がなされた。

今回の連続セミナーを通して、災害研究の素地として理工系の災害研究の発想ならびに世界の災害研究動向をレビューし、議論を重ねることで、災害研究への社会学的貢献のための着眼点を拓くことができた。このことは、学部教育や災害に関連した社会学的研究をすすめる大学院生の指導にも大いに役立つものと考えられる。